自転車と自動車の共存に関するドライバーへの意識調査

斎藤　万由子

本研究の目的は、自転車と自動車が車道上で共存していくためにはどうしたらよいかを自動車運転者の意識の面から探ることである。自動車運転者の自転車に対する向社会的な行動の実施状況や、向社会的行動に影響を及ぼす要因を明らかにするため、計画的行動理論と Prototype Willingness モデルを組み合わせた Ward らの行動モデル、自転車に対する怒りを自転車の道路利用者としての正当性の観点から Oldemeadow らの多重媒介モデルを参考にアンケート調査項目を作成した。調査対象者は自動車を日常的に運転する大学生とし、Web 形式のアンケート調査を実施した。

回答について因子分析を行った結果、「意図意欲」「命令的規範」「記述的規範」「知覚制御」「アイデンティティ」「怒り（違法）」「怒り（路肩走行）」「怒り（車線内走行）」の8つの因子が抽出された。因子間の相関を調べると、複数の因子間に有意な相関が見られたが、参考にしたモデルにおいて見られる相関に加えて、「記述的規範」と自転車利用者としての「アイデンティティ」に相関が見られた点が本研究における新たな知見であった。

この結果は、自動車運転者が自転車への配慮の「意図意欲」を高め、実際に向社会的な行動を行うにあたり、「周囲の運転者は自転車に対して注意を払っている」という意識である「記述的規範」が影響するというPrototype Willingnessモデルを補強するものであった。すなわち、自転車運転者への共感や理解の促進が「記述的規範」を高め、向社会的な行動に繋がると推察される。

今後の課題は、自転車運転者へのアンケート調査を行い、自動車運転者と自転車運転者の両者の意識を明らかにすることである。互いの意識を明らかにすることで、車道上での自転車と自動車の共存の方法についてより詳細な検討が可能となる。